

長尾氏藏五鈷鈴解

中川千咲

金剛鈴は云ふまでもなく密宗法具中の重器の一であつて、古來より法と共に傳承せるもの多く、その中には工藝上の優品も尠しとしないが、それ等に就いての記述は甚だ乏しき故、今長尾氏藏五鈷鈴を解説するに當つて、類品の主要なるものをも合せて概観することとし度い。

本鈴は高さ一七・五糎（五寸八分）、底縁内徑（最大）七・三糎（二寸四分）、銅鍍金、鈴として稍小型なるも、鈷形整ひ、柄太く、鈴の口邊を八花形に切込み、地に魚子を蒔いて花文を置き、且つ周圍に四忿怒尊像を鑄出してゐる。その形式の完好なるも見るべきながら、特に四忿怒の形容は甚だ奇古に、氣魄横溢し、人をして覺えず惛伏せしめんとするものがある。

由來金剛鈴には獨鈷、三鈷、五鈷、寶鈴、塔鈴の五種を數へ、五鈷鈴のみに就いて見るも、その鈷、鈴等の形状、裝飾には種々の様式があり、今之等のうちから長尾氏藏品に最も近き、鈴部に尊像を鑄出せる五鈷鈴を求むれば、その主要なるものに左の數點がある。

長尾氏藏五鈷鈴解

所 在	鈴部尊像
法隆寺獻納御物	五大明王
帝室博物館	五大明王
高野正智院	五大明王
廣島西國寺	未詳（六尊）
香川彌谷寺	四天王
京都神護寺	未詳（五尊）
京都觀智院	未詳（六尊）
目黒隆見師舊藏	未詳

之等の諸鈴は作行或は勇健或は精美にして現存五鈷鈴中の優品に屬し、而もその趣致には本邦所作の諸鈴と相隔るものがあつて、之等の多くが唐請來と傳へられてゐるのも誠に故あるを思はしめる。而して今入唐八家の録中よりその請來に係る金剛鈴の例を求めても五鈷鈴八、三鈷鈴五、卒都婆鈴一が數へられる。乍然惜しむらくは之等の形制については何ら知り得ず、また前記遺品の傳來に關して

も明徴あるものは一も存しないのである。而も大陸に残れるものは殆んど湮滅して今に傳へず、また文獻に關しても寡聞にして未だ聞く所がない。唯僅かに時下つた記録ではあるが成尋の參天台五臺山記に、や、用義の異なる例にせよ八大忿怒尊を鑄出せる九鈇鈴の記事あること等よりすれば大陸の金剛鈴にも之等の制のあつた事を推想し得るのである。

第一圖 法隆寺獻納御物五鈇鈴

(法隆寺大鏡ヨリ)

併し以上の遺品については之等の多くを大陸の製とすることは通説の一致する所である。今その一二の例について詳かにするに、御物(第一圖)、博物館藏品、正智院藏品の三點は何れも鈴の口邊を五花形に切込み、周圍に同種の五忿怒尊を鑄出し、上部の缺損せる御物は置いて他は共に柄太く短く、鈇は四方鈇の一所に大なる轉折があり、その根に獸面裝飾を有する點凡て制を同じうして居り、而も之

等の三例に見る五忿怒尊はその軌を互に全く一にしてゐる。また彌谷寺藏品は、鈴部尊形の四天王像なる點に相違があり、體もや、細長なるを特色とするが、鈇の形制は就中正智院藏品と甚だ相似てゐる。而して之等に共通する剛勁なる鈇の形式、鈴身の不明なるまでに複雑にして厚手なる彫刻を施せる様、またその彫像の怪奇なる形容等は到底我國の趣致ではない。更にその鑄成の細部についても往にして本邦及び鮮土所産の密壇修法具、錫杖等の鑄工品と相違する點もあり、之等が大陸の遺例なることは容易に首肯し得る所である。従つて之等の多くを傳の如く唐宋間に大陸に入れる諸家の請來にかゝるものと見るも妨げないであらうが、併しその製作年代の細に至つては未だその手法のみよりしては容易に定め難いのである。唯茲に考へらるゝ事はこの鈴腹面の尊容を明かにすることによつて幾分の推察を加へ得ないであらうかと云ふ事である。勿論かゝる問題は専門諸家に俟つべきであつて淺學なる私の爲し得る事ではないが、一の臆測を得たるを以て試に述べて大方の是正を請ふこととする。

今以上の遺例のうち忿怒尊ある法隆寺獻納御物、帝室博物館藏品、及び高野正智院藏品の三を見るに、この三例に見る尊形はその配列にこそ多少の差異はあるが先述の如く全く同軌に出でた五大尊像である。即ち何れも坐形にして不動は一面二臂、降三世は三面八臂、軍荼利夜又は一面八臂(第二圖)、金剛夜又は一面四臂、大威徳は六面六臂六足にして牛上に跨坐する。而して我國に於ける五大尊の通軌

は云ふまでもなく不動、大威徳の二尊の外は立形を主とし、殊に金剛夜又は多く三面六臂の像形にして之と合しないのである。たゞ之を圖像抄本の二三に就いて検索するとき之等の尊形と像容並びに持物の全く相合するものを別尊雜記第三十二―三十四所收の五大尊像

大正新修大藏(挿圖) 經圖像第六卷(第三) 及び醍醐寺所藏五大尊圖像

大正新修大藏經圖像第六卷(甲本)の二本の

(考古圖集ヨリ)

内に見出し得る。この二本は共に仁王經法五菩薩五忿怒を並べ描けるものらしく、後者には各像に「成蓮坊抄在之」と注し、前者には不動の傍に「智證大師請來五菩薩五忿怒之内也本無銘云々」の端書を有してゐる。成蓮坊は或は心覺の師にして仁和寺成就院第二代たりし兼意の事であらうか。若し然らばこの本は心覺の別尊雜記と最も近き

長尾氏藏五銚鈴解

關係あるものであらう。唯仁王經法本尊は通途には所謂大師様に依つて居り、且つ智證大師請來目錄或は安然の部類惣録の智證の請來に直ちに之に當るものを見ないが、彼の傳法中に仁王關係のもの

第三圖 別尊雜記所收軍荼利夜又明王圖像

(佛教圖像集古ヨリ)

多きに鑑み、またその像様が大師様に比して嘖恚怒張の様の誇大せられてゐる爲や、時下る像軌と解せらるゝよりして、姑く所傳によつて之を智證本としても差支へないかと思はれる。若し然りとすれ

一五

ばこの像軌は空海以後圓珍入唐頃に彼地に流行せるものとなるが、延いて之と同じ像様ある前記の三鈴も亦略この頃の製作と推定し得るのではないかと思ふ。

而して若しなほこの三鈴中に前後を定むるならば、帝室博物館藏品を最も古式を存するものとして最初に置き、法隆寺獻納御物を中

位とし、正

第四圖 五 鈷 鈴

香川 彌谷寺藏

智院藏品を

や、形式化

せるものと

して最後に

置くべきで

あらう。

次いで四

天王其他の

尊形を鑄出

せる例につ

いて言へば、之等のうち彌谷寺藏品(挿圖 第四)を以て最優の作とすべく、

その精巧の技、就中唐草の形、天衣の翻轉せる様等は正しく唐代藝術中に在るものであつて、天王の像軌も亦我國に通途のものに近い。

唯嚮に一言せる如くその形状の之等の三鈴に比してや、優麗なるを特色とするが何れはそれ等と相前後するものと見られる。次に目黒

師舊藏のものは手法に於てや、他に異なる所があり、鑄成甚だ堅巧に

して深き溝文の使用多く、また形式に於ても柄に鬼面を有する點はこの一群中には類なきものであつて更めて考量さるべきものであり、また西國寺、觀智院、神護寺の三品は作技に於て以上の諸品にや、劣り、製作の年代も之に準ずるものと思はれ特に西國寺藏品に見る騎獸の神形の如きは甚だ異とすべきであらう。

茲に長尾氏

所藏の金剛鈴を

見るに、その鈷

の形制鈴部の意

匠、就中此處に

諸忿怒尊を處狹

きまでに鑄出し

た點等よりして

直ちに前記法隆

寺獻納御物等の

(國寶帖ヨリ)

一群と甚だ相近きものなる事が知られる。而して更にその細部を見るに全形の均衡と趣致とは正智院藏品に最も近く、殊に鈷部の轉折の形制柄の制式に於ては殆んど同一にして、鈴の口邊に繩文を配する點も亦同じき意匠である。又鈴部の地に魚子を蒔き、之に花文を置ける點は彌谷寺藏品と軌を一にするもので、その鑄法等に於てもよく相通するものを持つてゐる。

唯この鈴を以上の諸品と比較して最も相違する點は、彼等に見る忿怒形は凡て軌を同じくした五大尊像なるに反して、茲に見るものは四尊であり、しかもその像軌も彼等に全く合致しない事である。今參考の爲に本鈴の尊形を要示すれば左の如くである。

A 三面八臂 左膝を竖て、箕座す。(圖版第十一)

左右第一手印を結ぶ。

右上手三鉗杵を執つて擧げ、次手内に屈して寶箭を夾取し、次手寶劍を持す。

左上手三鉗鉞斧を執つて擧げ、次手戟鞘の如きものを持ち、次手外に外に伸して寶弓を執る。

B 四面八臂 結跏趺坐。(圖版第十一)

左右第一手印を結ぶ。

右上手三鉗杵を執つて擧げ、次手屈して棒状のものを持ち、次手伸して寶弓を執る。

左上手寶珠らしきものを捧げ、次手寶箭一つを持ち、次手内にやゝ屈して鉞斧を執る。

C 一面八臂 右足を内方に屈し、左足を外に伸して坐す。(圖版第十一)

左右第一手相交へて各拳を作り一指を伸ぶ。

右上手三鉗杵を執つて擧げ、次手外に屈し拳を作り、次手寶劍を執る。
左上手上に屈して六角輪を捧げ、次手蔓草様のものを持ち、次手外に伸べて仰掌す。

D 四面四臂 一面馬頭 左膝を竖て、箕座す(圖版第七)

左右第一手一指を伸べ拳を作りて相合す。

右手屈して三鉗鉞を持す。左手蓮花状のものを持す。

今之等の尊形を見るにその像軌の我が一般の四大、八大等の明王

像と相距ることは御物等の諸例よりも更に甚だしくして、殆んど通常の圖像本中には求め得られぬもの、如くである。唯強ひて云はゞ醍醐寺本明王部圖像中の降三世と稱するものに本鈴のA像に相似た箕坐形にして持物の大部分を合する二例があり、馬頭ある忿怒尊形には馬頭明王を外にして別尊雜記に馬頭冠の金剛夜叉明王の例あるのが知られる。若し之に依つて之等の二尊をそれ／＼降三世及び金剛夜叉とし、他の二尊を大威徳、軍荼利に當てるならば之等は不動を缺く四大尊となるであらう。かくすれば不動を缺く理由としては我國の常として不動を以て五部の主尊とし兼て行者の己身を不動と觀する法あるよりして茲にもこの意あるものとする見解も一解釋として擬することも出来るかも知れぬ。唯然し云ふまでもなく宋代以降に譯傳せる忿怒部諸尊の數は誠に夥しくして、淺學なる私の容易に窺ひ得ないところであるから、其等新譯經軌中にこの四尊に當るものを存するかも知れず、又進んでは前記諸圖像中の降三世、金剛夜叉と稱するものも果して何時、何人によつて請來された圖像なるかを明にしないものであつて、或は新譯の像軌によるものなるに拘らずその本經を傳へざりし爲に濫に之等の名稱を付せられたものかも知れぬのである。

従つて茲では強ひて之を四大尊とすべきではなく、唯之等の事情を明にする事によつて之等が嚮の正智院藏品等に見る尊像より時代の遅るゝ像容なる事を想像し得ることを以て足れりとしたい。即ち之等が愈々我國の軌に遠くして且つ愈々奇怪の状を増せるは、早く

我國に傳へられた圖像以後に行はれたものなるが爲である事は密部一般の尊形の推移に徴しても、略之を確言して誤ないであらうと信ずる。

茲に翻つて再び本鈴の手法の細部を省るに一方には鈗、柄のや、形式化に傾いて古様を離れると共に、他方に例へば正智院藏鈴が各尊を唐草様の火焰によつて分ち纏めて居るのに比し、これは巧に像と像とを相侵す位にたちはだからせて居り、且つ尊像の胸部隆起を比較的省略し手足の隆起を誇張して、劇しき凹凸の間に奮躍の状を強調せる等の細部の工夫が見られ、又像形のみならず戟鞘鉞斧等の持物の形式の複雑、多様に涉れる點に様式上の推移の跡を辿り得るものであつて、尊形に見るところと併せ考へて之を前記の諸品よりもや、時代の降つた作とする事が最も妥當であらうと思ふ。併し前述せし如く鈗、柄等の形制の正智院鈴と殆んど同一なるを見ればさまで降るものとも考へられず、先づ彼について唐の最末期頃の所産であらうと推測されるのである。

幸に、本鈴の時代に關して以上の如く臆測し得るならば稀少なる唐末金工品中に於ける貴重なる一資料とすべきものであつて、その圖像的價値は姑く措くとしても、鈴部忿怒尊の鑄成の宛も彫刀を以て直ちに刻り出せるが如き生采ありて嗔怒の形相面に滿ち、巧なる臂々の働きは手足の端々にも怒氣を漲らして、その氣魄よく尺餘の像を凌ぐものあるのみならず、鈗、柄、鈴の諸部の均衡、且つは鈗を吐く獸面、柄の鬼目、葉々等の細部に至るまでよく當時の鑄工の

進歩を徴するに足る優品であると思はれる。

